

資料紹介

「四国西国順拝記」

本資料紹介で取り上げる「四国西国順拝記」（以下、「順拝記」とする）は、平成十年度に愛媛県歴史文化博物館が大阪の古書店より購入したものである。縦二三・九センチ横一六・八センチで、薄茶色の表紙に「四国西国順拝記」という題箋が付されている。全体は四冊からなり、構成は一卷が四国遍路の案内記、二巻が西国巡礼の案内記、三巻が道中日記になっており、そして四巻に四国遍路の納経帳が付属している。一卷と二巻は「四国遍路道指南」や「四国遍路霊場記」などの既存の案内記からの引用がほとんどであるに對して、三巻は実際に旅した際の道中日記になっている。

一卷の冒頭にはこの旅の往来手形の下書が記されているが、それを掲げると以下の通りである。

道中往来一札 下書

一 京都烏丸通五條下ル町住人升屋徳兵衛と申者、代々東本願寺門徒
二 而当寺旦那二紛無之候、此仁年来願望二付今般諸國霊仏靈社等
巡参仕度同行左之通召連罷出申候、道中ニ於而萬一病死等如何様
之義有之候共、其所如御定法御取置可被下候、尤同行之者御座候
之間願筋等有之候ハ、御取上御聞届可被下候、勿論此一札を以往

来共道中川々宿々

御関所無滞御通シ可被下奉願候、依而往来一札如件

文化六年巳二月

東本願寺末光善寺掛所烏丸通魚店下ル所

唯願寺 印

同行

道中川々宿々

御関所

御役人中

往来手形は東本願寺の末寺である唯願寺が作成したもので、この旅が「烏丸通五條下ル」に住んでいた京都の商人升屋徳兵衛一行によるものであったことが分かる。

では、この京都の商人升屋徳兵衛がなぜ遍路・巡礼の旅に出ることになったのかということについてであるが、これは「順拝記」三巻の冒頭の記述によりうかがえる。

文化六巳年に此度四国偏礼をおもひたちは、弥四郎甲子のとし風

井上 淳



写真1 「四国西国順拝記」巻一～四（表紙）

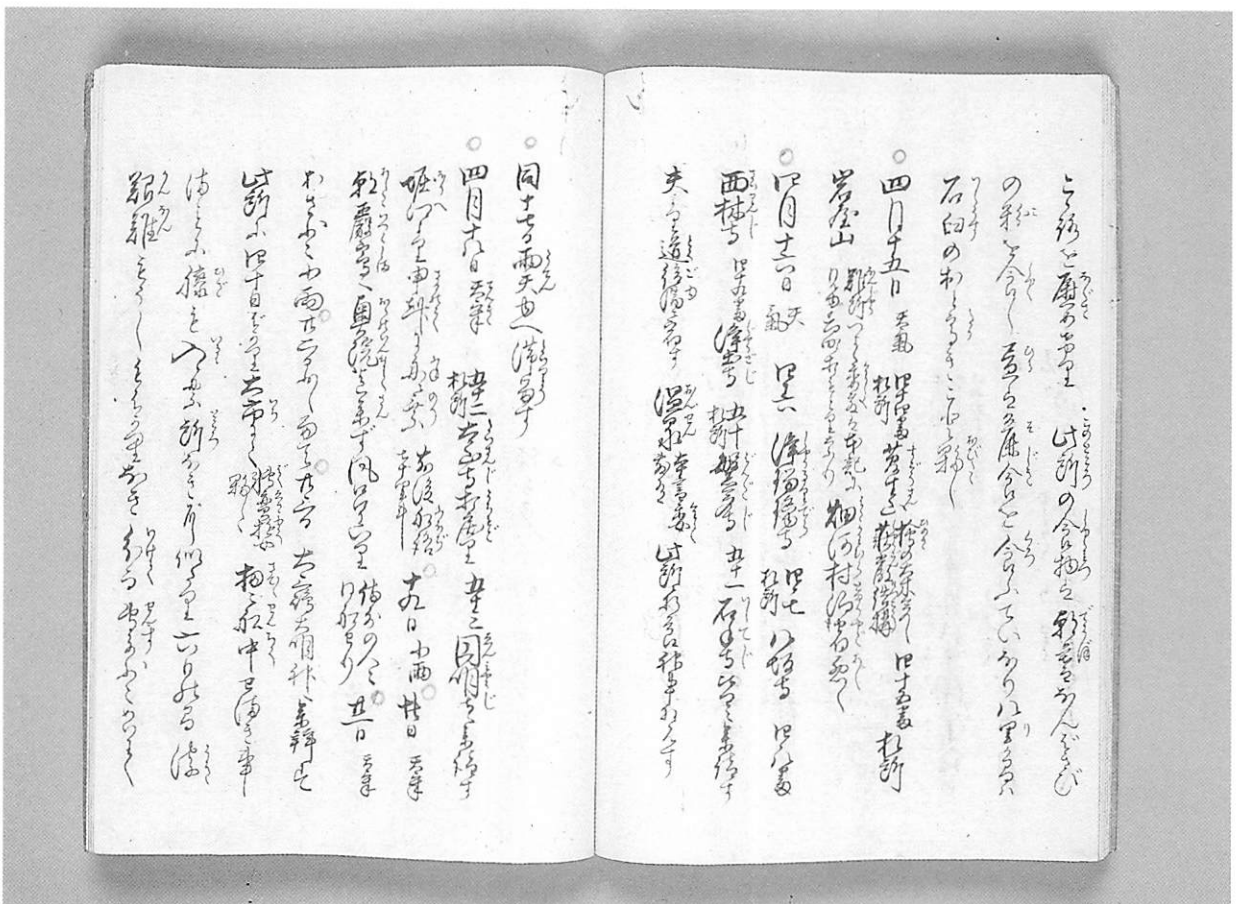


写真2 「四国西国順拝記」巻三（本文）

度病気におかされて、霜星をかさねて仏神御加護を蒙りたき存念、
 祈念信心すといへとも今にそのかいもなく侍り、何卒此たひは伏見
 する人にて市右衛門殿と云人の御思召より、四国参詣宜しき仰下さ
 れてより一統に氣ふく致され参詣す相定り、

ここには、弥四郎という人物が原因不明の病気になったため、その平癒を祈って遍路・巡礼に出ることになったことが記されているが、この弥四郎と最初の往来手形にあった徳兵衛との関係は、別の記述により子供と父親であることが判明する。また、旅には親子二人のほかは病気の弥四郎の妻、せむが同行している。弥四郎とせむとの間には二人の子供がいたが、せむは夫の病気の平癒を祈って、兄の弥太郎を自分の親の里に、妹の方を乳母に頼み非常なる決意をもってこの旅に臨んでいる。また、この旅には荷物をもつ荷物人が一人付いている。荷物人は、この旅が病人と女性を連れた旅であることを考慮して雇われたものと思われるが、升屋がこうした長期の旅において荷物人を雇うことができるような商家であったことがうかがえる。

つまり、「順拝記」は、升屋徳兵衛（徳子）、弥四郎（弥子）、せむ（専子）、荷物人（庄子）の四人による旅ということになる。その主なルートをおおまかに整理しておくのと次のようになる。

京都（二・二九）↓高砂（三・四）↓丸亀（三・六）↓金毘羅（三・七）↓七八番道場寺（三・八）↓阿波鳴門（三・一三）↓徳島（三・一七）↓土佐甲浦（三・二三）↓三一番五台山（三・二九）↓伊予城辺（四・九）↓道後（四・一六）↓堀江（四・一八）↓巖島（四・二〇）↓大三島（四・二三）↓七七番道隆寺

（五・二）↓丸亀（五・一〇五）↓牛窓（五・七）↓城崎（五・一四）↓桑名（五・二二五）↓伊勢参宮（五・二七）↓熊野権現（六・三）↓紀三井寺（六・八）↓石山寺（六・一五）↓京都（六・二二）

このように「順拝記」は、文化六（一八〇九）年二月二九日に京都を出発してから四国遍路と西国巡礼をめぐり六月二日に京都に戻ってくるまでの一二月間にも及ぶ旅の記録である。「順拝記」の旅は、関東・東国の旅人の最も典型的なコースとされる「伊勢参宮十西国巡礼ルート」に四国遍路と金毘羅・巖島参詣を加えたかなり充実したものであったといえる。「順拝記」には簡略な記載しかない他の道中日記にはないようなリアルな記述が随所にされているので、今後多くの遍路の道中日記と比較することで、四国遍路の実態をさらに豊かに描き出すことができると思われる。

なお、本紹介では、「順拝記」のうちの三巻道中日記のみ翻刻を掲載する。

史料 翻刻

四国西国順拜記付録三

文化六巳年に此度四国偏礼をおもひたちしは、弥四郎甲子のとし風度病氣におかされて、霜星をかさねて仏神御加護を蒙りたき存念、祈念信心すといへとも今にそのかいもなく侍り、何卒此たひは伏見しる人にて市右衛門殿と云人の御思召より、四国参詣宜しき仰下されてより一統に氣ふく致され参詣す相定り、則荷物人迄御頼成され忝き心中参詣ものども道中悦ひ入候、干時至て文化六つ巳とし如月廿九日より発足きまり、俄二専子順拜に相きまり、折節彼哉是やに身をくたき、前日心肺お、かたならず、併ながら信心の氣毒にや参詣かせらる、これとても小児式人これあらハ、兄弥太郎を親里へたのミ、妹は乳母に頼ミ置て、家内山中氏父老人にて御留守の様御たのミ置、中々下寿頃にて有ければ家内は人多くなぐ御世話を顧ミす、専子参詣に相究り候も、我等子弥四郎病氣平癒を祈る而巳ゆへなかく専子の長旅などはおもひもよらす出来せり、夫の病氣故波濤をしのぎて四国へんろす趣に定り、二月廿七日御室西加茂兩所御納経取に参り、帰に弥四郎下拙同道にて七里氏へ旅立御名残参候ところ、御見立の思召にて生測にて御叮嚀御馳走忝き事、二月廿八日家内諸親類不殘盃をかたむけ、睦じき旅の前日なり、同廿七日廿八日専子合羽笠よと衣裳とて混雑致し候へ共、何角扱可参と相定候故心のうちいさみて出来せり、親るい知音より御賤別の品々を携へ下されるを旅路へ持参す

日和よろしき廿九日朝七ツ時より発足致し、家内一統諸親類式三拾人ばかり御身送り被下、東寺執行にて御納経を頭戴相すみ、南無大師金

剛へ皆々参詣相済て、四国順礼四人ともつ、がなく参詣のこ、ろざしを実に籠下され候事ハ心肺にてつし同行も泣々茶所へ参て、専子廳て旅の繕ひ支度なと貯へ金など出来候而、夫より青梅色大嶋裕、南京形しゆはん紫、絞の衿をかけ、青梅黄格子帯、抱紫紋もめん布三尺おひ着し、白木綿脚半足袋にて笠をふかくきなして、扱草鞋などは、江州長浜の人、あさと云がはかせらる、を見て、扱々もならわぬ旅にと氣毒に存しる、然所海老の清子弥々いつの頃か帰京御尋下され、先此牀のやうする□、六月廿日頃と申置、則山中氏父徳子対顔の上宜敷御頼の意を受、袖を濡しわかれてより御家内一葉御身送下され段冥加の至り就中東寺の南大門にて七里氏母室山中氏母室其外二三人此所にて機嫌よく参るべしと仰下されかくの上姿もいとちいさく成迄身をくり下されけれハいと悲しく歩行、同行四人誘ひ遠路の道知らず波濤もいとわず旅路に趣き、ころのうちは身をさく斗都こひしさなつかしさ乃ま、もう□も憚りとなれ、是より四人は四ツ塚さして透行、江州、長浜女子奈五郎ト云、式人は西の岡かう谷まで身をくりくれられ、久世の橋を打渡り漁舟行けふさまを見て、扱も向日明神へ参詣もうしかう谷にて昼飯御振舞下され候て、夫より長岡の天満宮へ参詣致し、此所にて身送り式人はかへられて、跡にて心のうちにて数百里の海山を越、許多の日を重ねぬる事なれば、若又壹人にても永かき別れとならはいか、せんと思ひゆれ、大師観音様と誓ひをこめし涕泣する事雨のことし、徳子食物の小骨を負、弥子はもつき風呂敷包を負、専子は白木綿の大三年袋を背中負さふらを見て、扱々夫の病氣故かく若き人かか様の出立見るに付ても憐れ身に余り、先其夜はあくた河二而早く泊りけり、扱津国播州四国へ渡りては荷物多く、庄子流石の大丈夫の心も屈し給ふて身もつかれける、外の三人は亦々

足も弱き事なれば、難所を攀上り路なき巖窟に歩行するも、何卒此度の祈言を懸て病氣祈しに同じきやうにて有らハ泣々嶮岨をしたへ行、大三嶋、伊豫の国、舟中にては浪烈敷時は海底に沈へし、如何はせんと驚罵もあり、亦是高浪に盪れて腹顛倒し側に蹲りて頭を悩もあり、船梁に依て嘔吐をなすも船中の難義は譬んかたなし、然るに此度ハ仏神家内の信心にてさやうのこともなく、日々に泊りも申刻ばかりを限りと定、黄昏に趣く路は一向になく、有時は山中へわけ入れは四方の山高くそびへて屏風を立たるごとく、谷水流れたる人家も絶て寂寞たり、深き谷間細道を霧深ふして、前後足元悪く猿の声幽に聞へて身にシミ渡る、空恐ろし九斯るべきとは知られしに、一家あり其ところに一夜臥し、漸々ゆるりの火を力に思ひて嬉しく行過日もあり、食事といへは四国にては七ツ半二泊りては夕朝昼迄弁当迄もたき置、朝飯さいなく胸塞りけるとて吃ざりければ、冷飯を茶漬にて流し込西国順路の道までも四五十日は空豆切干大根而已にて漸々熊野路にて浅瓜を菜に求めるむ事なり、夏月に至てハひるは暑気夜ハ蚊蚤二食はれ一日の休みなく、山林坂路をこほる事、四五十日の早魃にて渴を潤す水もなきことあり、しかりといへとも二月五月初日に丸亀へ札納相濟、紙かや持参せしとも入□、亦はくま野路ハ大暑といへとも海辺ニ而蚊なし、重て参詣は蚊帳ハいらぬもの故書残し置、帑大袋は一人宛持参がよろし、就中百十三日の長旅に風雨少く是あれとも、まづたく仏神の加護にて同行無難四国八十八ヶ所、二月廿九日五丸亀へより三月八日五月初日二丸亀へ帰り、西国卅三所ハ、五月上旬より六月廿二日帰京、廻るも、山中氏伊勢太神宮へ代参、東寺への日参信感に通ぜし故、七里氏母堂ハ高野大師へ心願を懸下され候故まづたく此度折柄日和入梅に至ても其難なし、并両家の厚き御信仰に通しゆへ、

同行四人とも序なく帰りもうし、難有ことともなり、扱京都大坂は四国順礼ハとかくに病人斗也、中国四国九州の参詣ハ美々敷衣裳にて参詣人夥し事也、愚毫の重言書ならへたるハ恥しきなれとも、有の俣を書まいらす而已にて後々の御笑草にもなれかしと存し

○二月晦日、天気、惣持寺勝尾寺より箕面瀧を弁財天社津国平尾二而泊り

○三月初日、天気、池田酒屋を見、多田院の神廟参詣、満願寺西明寺の瀧を見て、中山の観音へ参り、順礼の御関所成れば皆々誓ひ立て信じければ観音百銅二而開帳ス、拝礼遂し歸りに門前の茶やにて休息致し、八ツ時に茶店に雛祭これあれば、都にて有ければひな祭もうけしと専子こひしく思ひさふらへは、足は痛む故早く中山寺の前にて泊り

○三月二日、天気、西宮住吉諸々旧跡を廻り摩耶山へ参詣、十八町坂道石階烈敷都より出懸の坂故、しりもちつきし人もあり、摩耶の麓にて茶店に見事成桜木花盛り故此所二泊り

○三月三日、天気、布引瀧生田天満宮兵庫須磨津国名所ところへ拝見す、明石北の入口大蔵谷にて一宿ス

○三月四日、朝雨天五ツ半時より天氣に相成、明石舞子濱尾上行平松高砂其外名蹟拜見ス、此日備前の方よりぶた獸の伊せ参と申、一日夜々宿々より送り相成、くびすじに金式両斗付有て、高砂舟宿、米屋嘉右衛門方二泊り、四日晚六ツ時より讚州丸亀への出船これあり、四人同行舟に乗安々其夜は船中ニ而休む、○五日天氣船中

○三月六日、天気、昼時二讚州丸亀へ着船、米や弥太夫方へ付往来証文など世話に相成、六日○七日、天気、則金毘羅山へ、四国順礼の義、

誓ひ込其夜滞留ス、翌日より四国廻り致し候俟心中に案し暮し居候なり

○三月八日、天気、未刻斗より少し雨天故早く国分寺前にて泊り、則四国廻り始日なれば七十八番の道場寺参詣、品々施物貰ひけり、餅三草鞋一油元結香物めし四人前下され、誠二大師の御慈悲と存し泣々頂戴致し、七十九番へ参此国分寺前二而泊り、風呂ありふとんあれ共寒く事、さいはなく都こひしきとおもひやり候

○三月九日、天気、八十一番白峯山坂道廿五町樹木なく屏風をりに譬へたり、四国の始の坂ゆへ烈敷思ひ、扱その日は弥四郎足裏に巻寸ばかり豆出来候ゆへ痛む事甚たしく、同行も心を煩ひ案事居候俟早速大師の御臨にて其夜に愈々次第なり、八十二番の札納根来寺迄坂路五十町も烈敷其道すがら民大家にて、中飯茶太物したしものにて、御施に預り緩々休息致し、御遍路さまい、いつ国と御尋有候俟御恥しなから京にてさふらと申うち、内室専子古梅裕みて扱々うるわしき寫にて何と申と尋られ、御恥しなから青梅しまにてもうしける、彼うち女中二三人京都へ近年のうち参り候ハ、最早田舎へも帰るまじと咄承候、八十三番札所参その夜は仏生寺前の茶や一宿ス、壺風呂ふとんなくわひすまひ、畳はあれとも墨を塗ることく扱々水悪き

○三月十日、天気、八十四札所八嶋寺坂道十八町烈敷、八十五番八十六番札所志度の浦にてそばやよき泊り也

○三月十一日、志度浦立朝より雨天にて難義、八十七番長尾寺へ参大窪迄の山林山溪川々数多雨烈敷一葉にめいわく致し、備前の岡山的女中つれ七人此所より跡やさきと相成、其夜は大窪寺の籠廿五町下にて一宿す、むしろ風呂なくさいのものはわらひ茶斗なり、其頃は雨八頻り降り向へは二里半斗行ねは宿はなし、是非に此所泊る、則備前

の人とも同宿ス

○三月十二日は快晴にて白鳥大明神へ参詣ス、白鳥村は民家焼失近月大災二付、しかしながら神の御威徳にて社内は御別条なく引田の浦で午刻二宿泊る、やど風呂あれとも畳三帖巻帖ハ往来ゆへ式帖二四人巻宿ス

○三月十三日、日和にて早朝より引田浦より阿州鳴戸迄舟をかり切て、備前の衆七人この方も同船に及ひ心よく鳴戸を一目致し、阿波靈山寺前にて宿借り、道すがら真砂三十町はかり山道老里斗烈しき道なり

○三月十四日、晴氣にて二番札所より八番札所迄、俗に阿州の十里十ヶ所と云、道に透行て寺僧出て式人の御遍路御宿参らすべしと仰かけられ候へとも、弥子荷物人式人ハ二三町程隔て急ぎ行俟御断もうし上候、扱其夜ハ法輪寺前二而宿二軒あり、大にあしくけんどの亭主故蒲団もあしく、併風呂ハ有、御僧ト合住居するなり

○三月十五日、天気、十番の切幡寺拾一番藤井寺より焼山寺迄山坂三里、阿州第一の高山巖石けわしき嶮岨、七ツ時半焼山寺の廿五町麓にて一宿す、夜風の音は身にしみふとんともなく、いたわしくも土中に丸太を揃へ其上に板をならへ古き筵を敷なし、風呂はおるか水も式三町溪間へ汲に参る事、夜更ぬつけては狼猿のこゑ山に響くその恐ろしく、鹿猪などは往來の道へもたらへた、く、帟袋を我家と定め寒さを防ぐなり、誠に都を袋うちよりはなつかしくそんし暮し日もあり、た、焼火をちからとそんじるなり

○三月十六日、十二番焼山寺へ参詣す、一の宮迄五十町つ、五里坂道難所道の側に遍路人の高山ゆへ遂す死ゆへ墳墓数多あり、老町ことに石地藏一の宮迄式百五十鉢あり、扱昼時より風雨坂道にてめいわくお、かたならず、五里道下りて一の宮の前二泊るはづか、一町はかり

乃御札所なれとも草臥翌日参詣ス、宿二三軒尋候へとも是なく難義に及び、亦々一人の老母へ頼ミ心よく一宿、風呂有むしろ二而、翌日徳寫参り故草臥なから髪を結なり

○三月十七日、天気、十三番一の宮、十四番常楽寺、十五国分寺、十六観音寺、十七番乃井土寺参詣ス、それより徳嶋へ趣き御城下にてぎん出し油元結求メのうちに有家より御遍路と呼懸て専子ハ参られて香物上々の味十本下され、善根二而日々に重宝と相成候、徳嶋の清見山金毘羅大権現巖石高く近国の絶景なり、寄麗美をつくし石階多く、石鳥居総馬舎此所にて施食を受此る五町斗北に当りて、猪口栄伯さまの御親類猪口圓太兵衛と云家中へ参上申、猪口氏参るへし仰下され候假四行人参、其夜一宿す、庭前の草華畠壹町ばかり引まわし、珍花言葉にも述がたく、酒肴出で円太兵衛へ御当所の御言葉常に姫子を御呼成さる、には御新造く御招き有、茶ちりめん衾にて御新造御通ひ、圓太兵衛殿専子を見て御新造なんと都人ハ美しき御生れつき、たちふるまいに至る迄もしとやか成との御挨拶、専子も恐入めいわくの躰、其後ハ夕飯御馳走、夜の具ハ絹の夜具にて恐入り遍路も旅の労を忘る、事而已なり

○十八日には雨中ゆへ滞留ス、此所より京都へ書面差出し徳之綿入さし出し置なり、十九日朝帰宅ス、曲物一にしめ到来ス

○三月十九日、朝曇九ツ時より空晴天気二相成、十八番恩山寺参詣もよし、十九番の立江寺地藏尊四国第一の御関所本文二委敷書記す置、白鷺橋にあれハ参詣なり難し、三日程前日より貴賤其沙汰多く、若亦同行のうち参る事かなわすハ我等より髪を切て御詫びをもうし上、其上数日を重ね参籠にて誓ひを込し存念ゆへに哉忝なきかなや一葉に安々と参詣致し候事、冥加にかなひ悦事限りなくまことに虎口を逃

る、心智せり、立江より一里行て鶴村にて宿す、筵成れども新宅にてよろし、風呂ハなし、近年宿はいり夫婦子一人の所也

○三月廿日、天気、廿番鶴林寺靈地は本文委敷記し有、廿一太龍寺道側に遍路人山路に臥故にや狼にくわれ死す躰を見侍り、氣得身にあまり一遍回向参詣人々唱ふてすき行憐れなり、太龍寺の奥院岩窟の坂道烈敷事ハ四国第一の閑地二而深山幽谷溪水遠く樹をおへ石高きこと言葉にも述がたく、巖窟山の奥に有女人ハ禁す、此所に専子老人にて荷物を守ること、但老人故氣得なれ共、弥四郎殿病氣祈る故我等三人穴へ参るなり、其恐き岩穴やう先々に参詣相済悦入なり、廿二番平等寺麓にて善根にて宿借呉候へとも、専子湯をたきちじやのしたし物くれ候故、醬油代とて十銅つ、出すへきやう、水ハ一町程の河へ取に参られ専子脚半打懸日々洗もの中々氣の得、併 仏神の加護にや弥子専子大丈夫に是あり、欣悦不斜日々の山坂道八里斗、五十町一里、草臥といへとも心は鉄石のことくなり、其夜寒き我等ハわたものハ徳嶋へ預け置候ゆへ、かミかやうちにて一夜をあかし、皆雨合羽をふとんと思ひ着、筵上なれハ雨合羽ハ音高くなり

○三月廿一日、快晴、月夜村かたうち峠の禁にさかせ河とて大河あり、一町余川幅同行四人河を渡り懸、壹町斗左は大海にて立浪夥しき谷河成れハ、水はけわしく浅瀬を尋うち、彼是余程の隙を取うちに人々乃唇は白く成り河中にていか、致けんとな煩ふ所に、渡たらずハ参詣は出来せじ、心はあつさ成れとも水は心よからず、是非とも弥子荷物式人連れにて無二無三河をこされて、専子腰切水た、免ければ、下拙帯しつかと以て渡る、折節丸龜の遍路三人婦人我等の腰につき渡り忝きや河端まで渡り候事ハまつたく大師の御慈悲、我等はこけず候処に四人は河端にて足をつき、既に専子水に溺と心せく俛面しろ

く見しゆへ気毒なり、併なから先々無難に渡りけり、着類は皆ぬれて途中にて不残単のものとさかあけり、此より専子は河渡りを恐る、ゆへ天気故河々水すくなく、且は土佐二打入て山河は広大成れハめいわくこ、智也、此日は山坂列敷難義なれば、五十町壱里を七八里程日々に歩行ス、葉王寺麓ひわさ村にて離座敷にて八ツ半時に宿ス、ふとん宜敷水沢山洗ものする、翌日は舟渡シ紐二而引渡る、風呂有宿よろしき

○三月廿二日、天気、ひわさより山々谷々河々難所多く、此所二而しんといことをせこいと云、よこから坂かんばか坂八坂八坂あふ坂松坂した坂ふくら坂はきの坂かちや坂からう坂八坂終なり、此間二一浜に二見によりたる所雌雄巖有、葉王寺より六里南阿州めんきやう村にて七ツ半泊る、ふとんなし湯なし、古畳にてこれあり、したしもの梅干を玉ふなり

○三月廿三日、雨天、雨風つよくなさ坂し、くいの浦阿波番所阿波土佐の国境、峠ゆへ難所なり、かんの浦、土佐の御番所、切手裏書出るので折節雨風強故往來の差出し事も風雨にて取出しがたく甚々めいわく致ス、干時此浦へ唐船老艘かんの浦二つなき有、唐人十五人の由吹流これ有、八ツ時に泊り、野子にて竹屋町善六方に宿ス、老人三人にて懇情人柄なり、よき宿翌日廿四日雨中故滞留す、土佐海辺成れは荒波四五間斗打上ケ、汐煙白雲のごとく磯打波は山を傾く程の音、嘶などハ一向にきこゑす、南海ハ見へ知れずと云、風烈敷故、此所二式百人斗も遍路人宿ス咄し、新き茶嶋裏ひ色蒲団一帖つ、着せ食物も宜敷候へとも、風呂は其夜はなくさりとては是より土州百里斗道々を案じ暮しける

○三月廿五日、天気、野子を立てふじ越坂、是より百五十町ばかりは人

家なし、右は御影林左は大海、四五間斗立浪にて四国第一の難所なり、飛石はね岩ごろく岩、雨天に通りがたく飛岩は石を飛越て入汐有、はね石式尺斗うゑへのれは刻かへされるなり、河渡り数多めいわくす、ごろくは五寸斗の円石壱町程巾大汐にては海へ引入る、ゆへまろく相成候、円石式間ばかり積上ケたることくゆへごろくと名付しなり、草鞋などは用意すへし、其日はしいな村六左衛門方二宿ス、むしろゆなくひかし寺迄は退屈せり

○三月廿六日、天気、下三津村是より東寺まで廿町余中に巖穴青岩多し、猿もどり狗尻り名跡数多絶景此辺より土州菊石出る、本文に委敷のせ置、廿四番東寺へ参詣す、女人禁制女人ハ女人堂二而札を納む、白幕の事ハ略す、これより女人道には岩の切とをし皆人目を驚す、室津浦もおなし石の切どをしなり、よく船入見事、廿五番の札所津寺へ参詣す、石階百廿余土州名産の硯あり、廿六番西寺へ参り女人を禁ず、土佐はいづれ山坂浜辺なり、夫よりは西寺より式里向ふ羽根郷二宿す、忠作二泊る、前は海辺、向ミれは荒海青々渺々たり、側に見事なる巖穴あり、専子海辺にて貝などひろひ旅の勞れを休むこ、ろやうに相見ゆ、其絶景古今無雙地也、風呂は二町ばかり有所へ参る、其道にて弥子青き空豆を求め始めて食スなり

○三月廿七日、雨天四ツ時より晴天、朝より河渡り、此日八川々多く馬にて河を越、亦是遍路の人をたのみて越も有、民家を呼懸たのみて越も有、専子河々にこまり人々乃背にて越されけり、なわり浦大河舟渡し安田河あらましを記す、廿七番神峯寺へ参、嶺高く坂路五十町の折もとり大難処、いおき村、新宅にて後家、一人住ス、筵二候へ共きれい心能休ミ候、夜に入て男老人宿へとまりにけり、しかれとも風呂はなく二三町の隣村へ湯やへ参るなり

○三月廿八日、天気、あき浦過てしんせう浜砂道七十町又山道百町はかり難所、くわしき宿村ハ本文に記し置なり、大日寺のまへに泊る、置湯殿あり庭前ニ蘇枌を植し泉水水吹上ケ宜敷泊りなり、此日は舟渡し紐引渡るは数々なり、遍路人の道乃 側に近き頃埋む事数多悲しきものなり

○三月廿九日、小月天気、朝廿八番大日寺へ参詣、廿九番国分寺へ参、河々坂道数々、三十番札所一の宮結構成大社、此所より入海三里の舟渡しに乗五台山の禁につく、卅一番の五台山へ参詣、土州第一の霊場なり、禁十五町はかり歩ミテ五十町舟ニ乗テ峯寺の禁につく、三十二番札所禅師峯寺坂道廿五町前後はけわしき、此所は江州石山寺似たり巖石也、かけ造り絶景、みね寺より五十町はかり小松原左は渺々大海、右は遠やま足のもととは四五寸も砂にて足を取る、漸々七ツ半時にたね崎浦につき土州御船役人夥し種崎浦二泊りて、此所にて専子唐の人の参るよしに思ひし歟、且六七十人はかり見物にくる人々あり、扱々都婦人が珍らしきに思ふゆへなり、風呂はなく古置にて紙の大袋にて休ミけり

○四月朔日、天気、卅三番高福寺へ参、三十四番種間寺へ参り、此間に淀河といふ大川舟渡し、三十五番清瀧寺坂道五十町乃打戻り、高岡町へ夫より山坂路四里か間一度の休息にて翌日道法にて少しきびしく歩ミ式人宛になり、福嶋浦入海三町はかり渡し場此所の砂礫にて相待居、専子は二人に離れ候やうに思ひ甚た氣のとく身に沉ミさふらふ、同船にて向の岸へ打渡りて則いのしり村七ツ半時に宿取り、是より廿五町の打もどり、上り坂岩石烈敷卅六番の青龍寺へ参詣もうし、黄昏に下参致し宿へつく、むしろ宿悪く風呂は二三町はかり行、三四人の入込ふろ二燈し火なく思ひ出しては悲しき事也、此日者五十町一里十

里余道法一葉に草臥る、なり

○四月二日、快晴、翌日専子三人とも坂路数里ゆへにや足痛むさふらを知らずしていのしり村より丑刻はかりに支度し寅刻に出舟、小船に廿五人斗乗、舟はゆり夜風ハ身にシミ扱もくめいわくす、泊より三町程出て入海す、八浜八峠を越候へ者難所ゆへ三里舟乗四国遍礼の衆々御免にていつれも乗侍り、専子何く痛むといへとも他力仏神の加護ゆへにや此日は舟乗とも十二里余も歩む也、五社より式里前、かげ野村泊る、筵風呂なく悪敷

○四月三日、三十七番五社へ参詣す、天気故道はか取なり、坂路烈敷佐か浦にて宿ス、もとよりむしろ風呂なし

○四月四日、天気、四萬十河大河の舟渡し、打過て土州の正木村に宿ス、あしきことはかりなし、一の瀬より半里斗前、庄屋へ徳兵衛米買参ルなり

○四月五日、天気、一の瀬真念庵大師堂へ荷物を預け、あしすり山へ志ざし此所より七里の打戻りなり、山坂烈敷海辺式里斗打行て樹林お、ひかさなりし所々ありければ、流石丈夫の人も身もつかれけり、足摺山二里前くほ津浦にて宿ス、向は海うしろは山漁人斗住す、青葉はなく彼内に蓬のことく髪はへし男一人あり閑家にあり、土州浦々にては燈油とはなく但しこゑ松にて明りと成り、此辺は鯨舟多し、むしろにて風呂なし大ニあしく

○四月六日、早朝より大雨、厭すくほ津立て札所蹉跎山ニ参り、諸堂七不思議とも拝見の上玉堂結構成る本坊あり、人数百人余、泊所あり、甚奇麗なり、道すがら風雨つよく右は高山左は海辺にて雨具ハ雨風裾より吹上ケ、衣服も濡そのうき艱難いわんかたなし、水にしほれてとかふ二禁にくだりけり、山林樹木お、ひ塞り称名のミにてあゆミ

ける、弥四郎荷物の入足早くあと武人は雨中と云少し遅く相成、山道にて見うしなとし心肺めいわくす、午刻はかりに五里の道をあゆみていぶり浦にて泊る、藁屋雨もり着類雨水にて濡しほれてゆるりにて炙り専子働お、かたならず、彼古家にて雨もり候故雨合羽にて防ぎ旅の草臥を休めけり、筵さいの物もなく難義筆にも述がたし事也、此所にて生鯛三尺はかり三百文余二而これ有よし、其日晚方に隣屋へ五六人の遍礼人、老女一人、武人十二三斗兒女、主人老人、供老人、専子始而知る人になり、則備前の西大寺村大嶋屋兵左衛門と云なり、白豆腐かたく切干の煮物未曾有悪きなり

○四月七日、四ツ時より天氣に相成候へとも、大水ゆへ河々水多き故あはらや成れとも滞留致しけり

○四月八日、天氣、いぶり浦を立て一の瀬の荷物を取りて寺山寺へ趣き、山道あしく四里か間に小河五十餘もこれあり、山河ゆへ割木などを流し置、其上を飛越てすき行間へ大きに損す、黄昏に及びて荷物人河を渡りて宿をもとむといへとも、米なきよし故、亦々大河を越て半里行、寺山前老里所有岡村にて宿ス、筵成とも宜敷、蒲団風呂はなく、前に流水ありて虫多く、月はさゑ渡り心を法界に楽しみけり

○四月九日、天氣、卅九番寺山へ參詣もうし、土佐伊豫の国境、土州にて皆人々勞すゆへ、亦々御笹山へ出る道すから土佐領往來するゆへ、身の毛も立ごとく思ひけり、境成れは高山にてめいわくす、伊豫上辺村にて宿す、仕立ものやうちにて泊る、水ハ悪き、娘老人にてはんと焼くれさふらへとも食事宜敷也、此所二而いもよろしく

○四月十日、天氣にて四十番觀自在寺へ參詣す、則笹山觀音へ參詣ス、委敷は本書二有之、三里斗山道烈敷三十町上り降り、三十町余の坂日影を覆ひ、足も立べき地もなし程の山林にて、心くるしく齒の根も合

て慄たるのミあり、浅間しく嶮岨を呼吸を限りに走るといへとも馳つて事あたわす、早や晩景に及び日も西山に傾き漸々と麓て大家の一屋を頼て泊る、憐れや不便成り専子も足の痛も厭す米をかき焼下され氣のとく身にあまりけり

○四月十一日、天氣、兩國の境ゆへ小松原坂路烈敷折ふし、土佐の大守御他界にて土州遠慮にて家並に戸を閉故、中食休息所甚々難敷す、併ながら善根にて能き人に逢、食物を求る、且は飢を凌けり、其夜は伊豫の宇和嶋才木町に宿す、能ふとん風呂寄麗なり、其所て長なすひ味曾漬宜きゆへ需持參せり、日々悦限なし

○四月十二日、朝天氣、午刻はかりより雨天、申刻ばかりより晴、四十一番札所稻荷、四十二札処佛木寺、四十三明石寺へ參詣す、此間山林多し、郭公の音を数多聞ゆ、山中より宇野町見ゆればよき驢と見聞すれとも、參りミれば甚々悪鋪、風呂は隣家にてもらいけり、此宿ことも多し、むさき事兩便所壺所にて小竹にてあみつけけり、水悪きふとん勿論なり、御影仕入此所に数多夥く下直なり

○四月十三日、天氣、坂道多し、伊豫新谷町二三町過て宜敷右方に買入あり、此所に宿をたのみ候ところ心よく借呉られ、はなハた奇麗、泊りところより遠山見ゆ、彼宿所に油上ケのこかね餅よき風味なり

○四月十四日、天氣、伊豫菅生山迄出る道なり、九里はかり歩ミ、八里か間谷底中央谷河山道左右に離れく山田人家ありといへとも甚悪き人家、宿頼むといへともかし呉られす、甚々めいわく致し、すなハち白杵村幾右衛門方へ宿す、庄やよりさし宿なり、此処朝暮なんばの粉を食ス、悪き事前代未聞也、參詣の人々菅生山迄出るかよし、前日に宿考置べし、月はれ渡り山河有て、幽谷の地月を見てこゝろを慰めけり、此所の食物は朝暮なんばさびの粉を食し、昼は飽食を食ふ

ていなり、八里か間ハ石臼のおと高きこと夥し

○四月十五日、天気、四十四番札所菅生山、松の大木多し、莊嚴結構、四十五番札所岩屋山、難所つよく委敷は本記に見ゆ、百町打もとりなり、畑河村泊宿悪く

○四月十六日、天気、四十六浄瑠璃寺、四十七札所八坂寺、四十八番西林寺、四十九番浄土寺、五十札所繁多寺、五十一石手寺皆々参詣す、夫より道後湯二宿す、温泉本書委敷有、此所二折節神事拝見す

○同十七日、雨天ゆへ滞留す

○四月十八日、天気、五十二札所太山寺打戻り、五十三円明寺へ参詣す、堀江より申刻に舟二乗、前後船路七十里斗、○十九日、小雨、

○廿日、天気、朝嚴寫へ奥院迄参ず、風呂にいり、備前の人々同船せり、○廿一日、天気、あさ少々小雨、○廿二日、少し雨天、○廿三日、大三嶋大明神へ参拝す、此所に四十日ばかり大市にて、博奕遊女夥しく、扱々船中せまき事まことに膝も入、る所なきに似たり、六日の間浮艱難もうしもはかりなき、分而専子少々めいわく義これあり候へとも筆にも述がたし、さいものきれ食斗にてうつくしく暮し着岸より精氣に相成心勇ミけり、清々船を広くかり切てするもよし、大師の御蔭にてさし当り之義これなき候へとも、後々病発と心を苦しめけり、船よりあかりて、五十四番札所延命寺、五十五番札所別宮は三嶋明神の別札ゆへ不参、五十六泰山寺、五拾七番札所八幡宮十五町斗山上烈敷、五十八佐札山坂路、五十九番札所国分寺いづれ参ず、同所にて宿す、筵にて備前の人は別の家居をかり、藁屋いぶせき裏やにて水は悪き、風呂もなくふとんハもとより、紅華花盛り、備前の人朝尋参り候へとも草臥、あとより発足す

○四月廿四日、天気、此道すがら生木の地藏尊五色井あり、五十町巷里、

四里休ミもなく参候処、六十番札所横峯山へ参入、百町打戻り高山にて下拙心悪き専子の世話二成り、大戸村大藤に宿す、むしろ風呂はあれとも蒲団さいはなし

○四月廿五日、天気、六十一札所香苑寺、北野東向観音寺の長老師の御弟子ゆへ拜顔の上旅の土産を下され、梅干煮物到来入、六十二札所の宮、六十三吉祥寺、六十四番札所前神寺参詣す、式里半はかりにて伊豫の西条湯谷にて宿す、徳子病氣発候処気絶のやうに相成、我等此所にて死なは弥弥郎殿・専子兩人引請申上候処へ、此所にて養生も叶すは餘り思ひのせつなさに、四国の土と歎き心くるしミ涕泣する事雨のこどく、専子は夫を悟て神前寺の石槌山へ参りて、山中にわけ入て坂路烈敷細道をた、独り五度心願をこめ下され、臆て入相鐘の頃も又ハ閑地とも厭はすゆへにや、仏神の加護にて一兩日のうち病氣平癒致し、神仏の御蔭にて有難次第度専子の御心つかい恐入候、能宿を需め養生も寛々致し、宿の主人医師ゆへくすりを玉ふなり、蒲団葉鍋さいの物甚々宜敷、○同廿六日、天気、滞留す、是より備前の印部の女子式人まさ・たく、老人の荷物一人丸亀まで同道す、備前和氣郡かゞと西町

○四月廿七日、天気、豊田に宿す、ふとんはなく風呂は向へ参る、小僧を善根にて同宿す、此より備前の三人つれ讚州丸亀迄日々同宿すなり

○四月廿八日、天気なり、六十五番札所三角寺、山路烈敷事は本書に見へたり、伊豫第一の高山雲辺寺一里前の佐野に宿す、小僧此ところにて亭主銀子失候を小僧に疑ひか、り、小僧は明白なり、宿人の鹿末なり

○四月廿九日、日和打続、六十六番札所雲辺寺、百町程の山坂峻阻を厭ず、薄暑つよく長の旅路に草臥、四人ともつかれ限りなし、それより六十七番札所小松尾寺、六十八番札所琴引八幡絶景本書に見へたり、

六十九番札所観音寺、七十番札所本山寺へ皆々参詣す、此所にてよき宿餘多これあり候へとも、日蓮宗にて一向に宿もかし呉さふらはずゆへ難渋に及びけり、早黄昏に相成て心を苦しめ居候処に、いか成因縁にやよき人に逢て善根の人に誘ひ行て、すなハち本山寺禁岡本村平井氏伊右衛門殿方にて一夜御宿善根なし被下候段有難仕合御志の程筆にも尽かたし、専子丑の刻ばかりに起て眼をさまし、丸亀をわがやと思ひ定て書翰など参るよし、思ひやりて都こいしく思ひ、皆々樂しみ居候ゆへ心も勇し故なり

○四月晦日、天氣暮六ツより大雨、七十一番札所弥谷、七十二番札所まんだら寺、七十三番札所出釋迦、七十四番札所甲山寺、七十五番札所善通寺へ参詣す、金毘羅山へ先達而大願致し置候故御札に亦々金毘羅山へ御札を遂奉る、陸路なれとも今朝早く何れも睡眠にて身も世もあられず、おふさ村にて宿ス、宜敷

但シ弥谷へ式里打戻り、一り半余コンビラへ又一り半余おふさ村迄○五朔、天氣、七十六番金倉寺、七十七番道隆寺、両札所参詣す、道隆寺にて酒食色々善根多し、併乍四十日はかりかた空豆、切干二而食物にて四国大願にて安々と御蔭にて順り候へはのこり多く有難存し、早飛立斗と丸亀さして歩行、すなハち昼時に米や弥太夫方へ着す、京都より書通または色々品々の贈り被下候へハ、誠に嬉しき事限りなし、扱々長旅路に届なく道中致しともまつたく大師の御蔭にて同行つ、がなく八十八ヶ所相納候事有難ぞんし、弥四郎どの病氣も先々同様に有ければ皆々これを歎きけり、大暑をも厭す是より西国三十三所の観世音へと思ひ立、負つるの品々の調もの迄致し、京都へは書面荷物を差出し、○同二日、天氣、○同三日、天氣昼とき少雨天、○四日、大雨、四日よりハ霖雨に入候ハ、定而打続雨中あんし

居候所に、以外に日々天氣打続仕合に成り、○五月五日、天氣、丸亀二滞留致し午刻ばかりより四国の道を出船す、○六日、小雨、同、○同七日、朝雨天九ツ時より晴に成り、備前の牛窓の浦より舟てあがり、備前三ツ石に宿す、備前印部の陶器名産夥し

○五月八日、朝曇四ツ時より晴空、赤穂焼塩名産なり、斑鳩寺へ参詣ス、其夜三町北二住す、前後遠山宜敷地とや月もはれ渡りけり、宿内室京て住し人ゆへさいのもの迄宜敷なり

○五月九日、天氣、書写山へ相納、女人禁制の地、夫より廣峯山へ廿町斗の坂道烈敷暑はつよく休息所もなし、法華山へ参禁にて一宿ス○五月十日、快晴、播磨の清水寺の南禁に八ツときに宿す、新や新左衛門方二前後八十町斗坂路ゆへ早く候へ共、此所て泊り心よる敷宿よく洗物多く致し

○五月十一日、天氣、二三日は長旅のつかれにて道もはかどらず、おれ宿にて泊り、茶をもみ居けり、七ツとき宿スよき也、此道すからは近年焼失夥し故かりやおほくかいこ養ふ事、十五里斗也

○五月十二日、天氣、専子足はれ氣毒成とも芦田に宿すへしと存候処、泊所なくよき大家これあり候ところ、過行て承候へは牛飼の宿のよしともうしさふらゆへ、草臥ながら式里行、丹州遠坂与右衛門に宿ス、甚々むさき言語限なし、宿亭主夜もすから碁を打蚤蚊は多く、ひるのあつさに勞れ夜は蚊にてくるしめけり

○五月十三日、天氣、但馬与井田村唐津や甚三郎方へ泊り、宜敷家内娘美婦あり、座敷襖、松鷹の絵見事、同行四人順礼哥を唱へければ珍しくや思ひけん、近所老若夥しく参けり

○五月十四日、天氣、午刻斗にき野崎湯本かぢや治左衛門宿ス○十五日、○十六日、両日少し雨天、湯嶋の記ハ本書委敷、○同十七日

朝廿五町入海舟渡し二而発足ス

○五月十七日、朝天気、暑気山道烈敷岩瀨村にて宿す、前日三四日入湯致し候故にや、徳兵衛長旅の勞れにや、入湯にて心ゆり候故、足もと勞れ心くるしく十里斗歩ミ、我等一向に勞れ煙草吞とも身体なき故、専子の世話二相成候

○五月十八日、天気、丹後の成相天の橋立切戸文殊参詣す、由良迄の七曲八峠いもし峠けわしく絶景、中山村にて宿ス

○五月十九日、昼時迄雨天、九ツ時炎暑、松尾寺参詣もうし、高濱二而宿ス、○五月廿日、天気、八百比丘尼宮、小濱城下を打過て熊河二宿ス、和泉屋定右衛門よき所、是より一乗寺村弥勒殿はしめて同道す

○五月廿一日、天気、熊河を立て若州御関所往來相濟、夫より山道烈敷打過て江州今津へ昼ときに着し、竹生嶋に三里舟渡りにて参詣す、其夜浪高きゆへ坊にて一宿す、絶景筆に述べたく、大暑なれとも風吹通り蚊なく、油上ケかき餅風味よく朝の食事寄麗なり、夜分は本堂にてこゝろ静に終日通夜の人々あり

○五月廿二日、炎暑厳敷、四ツときに尾の江へ着船す、長濱春照打過て関ヶ原にて夷屋忠治方二而宿ス、上々宿也

○五月廿三日、天気、少之間夕雨有四ツ時、白石百町の打戻り谷汲へ参詣、札納相済余程の隙入白石船宿錢屋嘉左衛門宿ス

○五月廿四日、天気、白石より桑名迄十四里舟に乗、此所より因幡八田郡大門村同行五人おみな・熊・いわ・松女子四人、助右衛門是方京都迄道つれに相成り、同船着岸、存居候ところ早魃にて七里斗にて黄昏に趣き廿五日明六ツときに桑名へつき、其夜食物甚々めいわくす
○五月廿五日、天気、伊勢上野にて宿す、蚊多し青物ハなきよし、鯛

食し玉われとて梅干にて食す、水悪き風呂は有

○五月廿六日、天気、津の一心田善光寺一鉢分身の如来貴賤群集開帳参詣ス、其夜明星桶や離れ座敷にて宿ス

○五月廿七日、快晴、此日は十一里斗殊二両宮末社廻り、岩戸末社二見迄も参詣もうし、大道也、打戻り外宮筋向橋一町目辻傳兵衛方二宿ス

○五月廿八日、天気成とも朝曇のちは晴に相成り、野尻峠晩方及び、弥四郎殿渡し船にて、金剛杖を失念ゆへ荷物人取に参り待合せ、廿五町峠打越、専子因州同行、衆誘て始而宿取二参られ候、中井平太夫方にて一宿す、はなハた寄れい、床には懸もの、碁盤将棋ともこれあり、くわとう口なとあり

○五月廿九日、天気、野尻太神宮へ参詣もうし、本書有増しるしおく、紀州熊野浦長嶋有馬屋清吉方に宿す、よき宿なり、庭前大海絶景、艸華数多あり、此所にて洗物致すなり

○五晦、天気、まごせ坂岩山にて難所なり、尾鷲濱中や泊り、蚊帳はあれともふとんはなし、此所の習ひと云、熊野浦ハ風烈敷海辺成れはもとより蚊はすくなきなり

○六月朔日、朝早く起て八鬼山大難所、三里を打越大暑成れはたへがたく、夜は蚤せ、られ日のあつき命を限りに歩み、何れ五十町一里の八合升なり、はきより曾根へ二里なれとも一里舟にのる廻れは二里難所まぬかれ、曾根太郎坂同次郎坂七十町斗窓に壁をのほるがごとく難所、あご鹿の浦二而泊り、此所鯨冬分は大小取る、なり、料理や旅商人宿やにて浅瓜醬油煮物寄れいなり

○六月二日、天気、大亀坂大ふき坂木のもと打過て有馬迄は小松原、夥し、炎暑強十五町斗真砂やけつむ事、三寸斗、足を取て絶がたく漸々二

松原へ打入候ところ弥四郎どのを見うしない、其時の艱難心勞れ致し候へとも忝や觀世音さまの御陰にて早速に逢ひもうし悦ひ限なし、七里が濱親しらす子しらすの大難も早魃ゆへ浪も遙ミゆ、新宮へ参詣ス、宮崎二而宿ス

○六月三日、天気打つ、き、見たらひ峠吉里難所、濱の宮へ参りて第一番の那智山へ熊野権現へ御札を遂奉り、坂道十八町、甚々厳舗午刻斗より大雲取貳百町、嶮岨洞切坂船見峠熊野第一の難所、小くちにて宿ス、能々考て坂下に大雲取小くも取の境の河有前後にて宿するがよし、熊野浦文化五年辰七月廿五日に大風にて十里餘ばかり並木大樹倒れ損す事 夥し、那智山御瀧道大にそんし、桧さし渡し四五尺ばかり数多倒れ道悪き事広大なり

○六月四日、天気、大暑打続早魃にて一滴の水もなく、小雲取坂三里大難所、渴してせこひ事限りなし、本宮熊野大権現へ遂て廿町餘坂路を越て湯の峯の温泉にて宿す、入湯の義は本書二委敷

○六月五日、天気、寅刻ばかりに湯の峯を発足す、鍋わり坂とて至而の大難所二里余、賊難にもあひ不申忝次第、妻夫さか小廣峠高原二宿す、ふとん悪敷うし部や近くて蠅多くむさく

○六月六日、快晴、近露峠八しな峠大坂峠十丈峠塩見峠何れ難所、南部田中や茂兵衛宿ス

○六月七日、天気、牛鼻巖穴ミなへ峠かたくら峠豆坂しほや峠原谷にて宿す、庭ふる新屋宅にて因幡衆向て泊る、宿の亭主用事有つて朝案内被下候

○六月八日、天気、日高の道成寺鹿ヶ瀬上下五十町坂ほうづ峠いとが峠雲雀山得生寺へ参詣す、此日は紀三井寺へ出るを嬉しく存しおほくの道なり、蕪坂藤代峠紀三井寺へ参前にて宿ス

○六月九日、天気、和哥浦舟に乗りて名勝旧跡不殘順拜し、三番札所粉河寺へ参ル、此所二宿す、ふとん蚊帳ともあしく

○六月十日、天気、粉河を立て四十八がせ川飛越て道悪き山坂熊野路にまさりと云、石くるまにて足損す、四番札所榎尾寺へ参詣す、高山なり、天野山結構参詣す、天野にて宿とるべくとそんし居候処甚々むさく、人に尋ければ廿五町さきにミそじと云所に小刀や誰と云宿宜敷あるゆへに参候ところかし呉れ不申ゆへ難義、しかしながら至而たのみ候故にや借呉られ候故案心いたし

○六月十一日、天気、五番藤井寺へ参詣す、河州靈仏神諸々へ参詣す、岩屋峠を打過てかさ堂染寺当麻寺へ参、当麻まへ茶屋にて玉屋徳兵衛二宿、よきなり、○六月十二日、曇候へとも無雨、六番壺坂へ札納、土佐町へ打戻り紙屋佐兵衛方にて宿ス、なすひ皿ひら皿よろし

○六月十三日、天気、七番の岡寺二而諸々旧跡参ル、八番の札所長谷寺へ三輪の社へ参詣す、柳本にて宿す、早魃にて雨乞多し、庭の造り木夥し、池には蓮見事はれたる所て亭あり、しかしながら蚊おほく

○六月十四日、天気、九番南圓堂へ札納め、旧蹟残りなく参詣し、長池にて泊り、此節余程の天気ゆへ飲水なども家々にかこい置、蚊は山をつくことし

○六月十五日、天気、昼とき上醍醐廿町斗坂に打か、りしばし大雨に逢、烈しき雨風にてざんし絶かね、併ながら跡ははれ渡りけり、石山寺へ参、則 禁河端茶やにて宿ス、此所にて洗もの心よく致し

○六月十六日、天気、卅二番 観音寺餘程坂路難所札納め、夕方観音寺禁にて宿取候へともむさく、大雨一村降り来る様子相見へ早々宿取けり、風呂のうへには円座かさのことくつりおろし、風呂場より小便致し其むさき事たとへむかたなし、古きあばらや蚊は数多、夕方四

方をしめきりしはすは数多の蚊ゆへ誠にま風呂の居城にて宿悪き、さい物は香物ばかり最早一兩日に成候へ者慎しミ居候、蚊帳に九人寝入候故暑氣事はかりなし

○六月十七日、朝五ツ時迄雨天、其後は上々の天気にて、三十一番の御札所長命寺へ参詣、石段は六百段もこれ有て江州守山伊勢屋孫六方によき宿す

○六月十八日、早天より大雨雷鳴烈敷、十四番札所三井寺へ札納め、十五番今熊野へ札納め、五条橋東河内屋勘兵衛方二宿す

○同十九日、雨天、京都札納め参詣相済、新町二而一宿頼候処御叮嚀御馳走に預り、因幡同行五人同居二而翌日朝発足、○廿日大雨又翌日四人発足

○六月廿一日、天気、丹州穴太寺へ札納め同所二宿す

○六月廿二日、天気、善峯寺へ札納め、西国三十三所不残す札納相済、機嫌克西七条雲光庵へつき、五条より皆々御迎ひ被下悦事限りなし、附録ハ重言にて御恥しくありの俣を書しるし置さふらふ、後の御笑ともなれかしとぞんし候、併なからあまりの愚毫に恐れ入候間他見は御免御断申上置候、穴賢く

四国偏礼細見大図 大坂書林 心齋橋筋順慶町柏原屋清右衛門 板
同町 同 與市

四国遍路道しるへ小本一冊、此書八十八ヶ所縁起宝物等悉書記し、村つ、き道法名所旧跡山河渡海順路都而順礼の心得をしるす、○八十八ヶ所寺々山々絵図縁起名所旧跡等は高野雲石堂寂本あらハす四国霊場記ニ委敷ミへたり